

大学
公募制推薦入試
小論文大学
公募制推薦入試
教養（国語）大学
公募制推薦入試
教養（英語）大学
自己推薦入試
小論文大学
一般入試
（国語）大学
一般入試
（英語）大学
一般入試
（数学）短大
公募制推薦入試
小論文短大
公募制推薦入試
教養（国語）短大
一般入試
（国語）

記入上の注意

記入例

びわこ学院大学短期大学部 平成二十九年 推薦入学試験「小論文問題」

次の文章を読み、あなたの考えたことを六〇〇字程度で述べなさい。

クラスメイトやメル友だけが友達ではない。「言葉を友人に持とう」と言ったのは寺山修司だった。「言葉の肩をたたくことはできないし、言葉と握手することもできない。だが、言葉にも言いようのない、旧友のなつかしさがあるものである」と。

小欄左上の「折々のことば」にちなみ、本社などが、大切にしている言葉とそのエピソードを中学・高校生に募ったら、1万6千超が届いた。数千と踏んでいた担当者は、若い世代と言葉との熟い「友情」に驚いたそうだ。

名言や有名人の言葉ばかりではない。日常で出会った言葉が目立ち、優秀作が21日の紙面で紹介された。その一つ「暑くもないし、寒くもないし、ちょうどいい気温だから春かなあ」は中3の須志田千尋さんが寄せた。

認知症の祖母の言葉という。本当は秋なのだが、祖母は分からない。でも肌で季節を感じている祖母はすてきだ、と彼女は思う。人の存在の深みから届いたような言葉と響き合うその感性もすてきである。

掲載外の言葉もいい。「花は咲くときにはがらばらない。ゆるめるだけ」（中3）は担任からの誕生日カードに書かれていた。「お前、一年前の悩み言える？」（中2）は塾の先生。人は成長する。今の悩みはささいなことだと。応募の一枚一枚をめくりながら、時を忘れた。

即効薬のように力をくれる言葉がある。浸みた雨が泉となって湧くように、時間をかけて心に届く言葉もある。どこか人との出会いに似ている。言葉を友人に持ちたい。

（「朝日新聞」『天声人語』2016年1月27日付）

AO入試

指定校制
推薦入試

公募制
推薦入試

自己推薦入試

一般入試

センター利用入試

社会人入試

外国人
留学生入試

編入学試験

出願手続

受験上の注意

合格発表
入学手続
入学辞退

学費

奨学金制度

Q&A

平成29年度
入試問題

大学
公募制推薦入試
小論文

大学
公募制推薦入試
教養 (国語)

大学
公募制推薦入試
教養 (英語)

大学
自己推薦入試
小論文

大学
一般入試
(国語)

大学
一般入試
(英語)

大学
一般入試
(数学)

短大
公募制推薦入試
小論文

短大
公募制推薦入試
教養 (国語)

短大
一般入試
(国語)

記入上の注意

記入例

短期大学部

公募制推薦入試「教養問題 国語」①-1(1)

びわこ学院大学短期大学部 平成二十九年年度 推薦入学試験「教養問題」

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

啜啄そくたくの機はたらきということがある。

得がたい好機の意味が使われる。比喩であって、もとは、親鶏が孵化しようとしている卵を外からつついてやる(啄)、それと卵の中から殻を破ろうとする(啄)のことが、ぴったり呼吸の合うことをいっただけのようである。

(ア) 卵が孵化しようとしているのに親鶏のつつきが遅ければ、中で難は蓄意たくましてしまふ。逆に、つつくのが早すぎれば、まだ難なる準備のできていないが生まれてくるわけで、これまた死んでしまふほかはない。

早すぎず遅すぎず。まさにこのとき、というタイミングが啜啄の機である。自然の(一)セツリはおどろくべきほど精巧らしいから、ほかにもいろいろある形で啜啄の機に相当するものがあるに違いないが、孵る卵はもともと劇的なものといつてよかろう。われわれの頭に浮ぶ考えも、その初めはわが卵のようなものである。そのままでは難にもならないし、飛ぶこともできない。温めて孵るのを待つ。

時間をかけて温める必要がある。だからといって、いつまでも温めていけばよいというわけでもない。あま長く放つておけばせつかくの卵も腐ってしまう。また反対に、孵化を急ぐようなことがあれば、未熟卵として生まれ、たちまち生命を失ってしまう。

ちよつどよい時に、卵を外からつついてやると、難になる。たんなる思いつきも、まともな思考の難として生まれかわる。われわれはほとんど毎日のように、何かしる新しい考えの卵を頭の中で生み落としている。ただそれを自覚しただけである。

(イ) 二れがらっぱな思考に育つのは、実際にくまな偶然のように考えられる。卵はおびただしく生まれているのに、適時に殻を破つてくれるきっかけに恵まれないために、孵化することなく、闇から闇へ葬り去られているのであろう。

逆に、外から適当な刺激が訪れて、(II) 破るべき卵の殻がありさえすれば、孵化が起こるのに、と思われることもすくなくない。ところが、そういう時に限って、皮膚にも頭の中にもちよつどその段階に達している卵がない、ということが多い。せつかく、つひばむ力むりが外から加わっているのに、空しく機会を逸してしまふことになる。

頭の中に卵が温められていて、まさに孵化しようとしているときなら、ほんのちよつとしかかけがあれば、難ががえる。この千に一番の兼ね合いが難しい。それで啜啄の機が偶然の符合のように思われるのである。古来、天来の妙想、インスピレーション、靈感などといわれてきたのも、それがいかに(III) 稀有まれなことであるかを物語っている。

(イ) 稀有だとしても、起ることは起っているのである。人間ならだれしも靈感のきつかけの訪れは受けるはずで、それをインスピレーションにするか、流れ星のようなものにしてしまふかの違いはすぎない。これには運ということもある。いくつ努力してみても、運命の女神がほほえみかけてくれないければ、着想という難は孵らないであらうと思われ。

もつとも、どんなに運命が味方してくれても、もとの卵がないのでは話にならない。(II) 人事をくわして天命をまつ。偶然の奇蹟の起るのを祈る。

すこし話が神秘的になつてきた。もつと日常的な次元で考えてみる。

何でもなし人間と人間が、たまたま知り合ひになる。互いに不思議な(II) カンメいを与え合つて、それがきつかけになつて、めいめいの人生がそれまでとは違つたものになるということがある。出会いである。(II) 一期一会だという。

ほかの人たちとどれほど親しく交わつていても得られなかったものが、何気ない出会いで与えられる。ここにも啜啄の機が認められる。われわれはそれと気が付かず、そういう偶然を一生さがし求めつつけているのかも知れない。それにめぐり合ふとき、奇蹟が起るといふわけだ。

難解な本は一度ではよくわからない。それに絶望しないで、くりかえし読んでみると、そのうちに理解できるようになる。

(b) 読書百遍意おのずから通ず。古人はそう教えた。思考も同じことで、初めから全体がはつきりすることはすくない。何度も何度も考えているうちに、自然に形があらわれてくる。

短期大学部

公募制推薦入試「教養問題 国語」①-2(2)

人間にとって価値のあることは、大体において、時間がかかる。(3) ツツキヨウに生まれればすばらしいものもときにはないではないが、まず、普通は、じつくり時間をかけたものでないと、長い生命をもちにくい。寝させておく。温めておく。そして、決定的瞬間の訪れるのを待つ。そこへはすべて一挙に解明される。

(c) 『論語』の冒頭にある「句、学ヒテ時ニ之ヲ習フ、亦、説バシカラズヤ、亦、説バシカラズヤ」とも読書百遍と同じように考えることができる。勉強したことを機があることに復習している、知識がおのずからほんものになつて身につく。それが愉快だといふのである。学んで時にこれを習う、は啜啄の機はいつやってくるかもしれない、折にふれて立ち返つてみる必要がある、と教えているのであろうか。

ここで自分の経験を引き合いに出すのは、いかにも面はゆく、ためらわれるが、ものを考えようこびを知るきっかけになつたのは、何だろうか、とふりかえつてみて、思い当たることを書いてみる。

昔の中学校で三年の国語の教科書に、寺田寅彦の文章「科挙者とあたま」が載つていた。教科書で読むとどんな名作も台なしになつた。いかほどおもしろいものでも、好きになりにくいものだ。よくそういう話を聞く。多く場合、その通りである。ただ、ときには例外がある。その例外がこの寅彦の文章であった。

「科挙者とあたま」を読んで、(III) 急に頭がすつきりしてきたように感じた。どういふ変化が頭の中で起つたのか知るよしもない。とくにものを考えようという気持ちになつたわけではないが、何でもないと思つてた常識をひと皮めくと、その下に、たいへんおもしろい世界が眠つていて、ということに気付いたのはひとつの発見であつた。ことばというものは(4) アンガイアンガイやつかいつかいなもので、あまり信用しすぎてはいけないうだ。そんなことをくぼんやり感じるようになった。また、逆説ということばを知らなかつたから、そういう概括で読後感を片付けてしまわなかつたのも幸運であつた。

「科挙者とあたま」に出会ふ一年ほど前から、よくはわからぬままに(1) 瀬川瀬川の作品をあこれ読んだ。何か心ひかれたからこそ、わからぬものをいくつも読んだのであろう。やがて本当にわからなくなつて投げ出してしまつた。

そのあと寅彦にめぐり合つたのである。漱石と寅彦は(3) 師弟の間柄にある。当時はそういうことすら知らなかつたが、いまにして思つて、漱石によつて生まれた卵が頭の中で温められていて、それが寅彦の文章によつて殻を破られ、ひびくながらも難になつたのである。啜啄の機という種語をあえてもち出したのも、こゝろ因縁話めいたのがあるからにほかならない。

近年、われわれのまわりに知識や情報があふればかりに多くなつて、手におえない知識を処理するために、知識についての知識ともいふべき方法への関心もともに高まつてきた。いわゆる「ハウトゥウ」である。

一次的知識だけではなく、知識の知識である二次知識に注意する(5) ヨユウヨユウが生まれたのはたしかに進歩である。「ハウトゥウ」を軽んじる傾向もないではないが、すぐれた方法には学ぶべきで、毛嫌いするのはおかし。

ハウトゥウの技術で、ひとづ気になることがあるとすれば、いついかなるときも、快刀乱麻、これで問題が解決するような錯覚を与えている点である。学んで時にこれを習う心を忘れがちになる。即席的效果を期待しやす。

加えるに時間をもつてすれば、ハウトゥウの技法も難になる卵を生み、あるいは卵を難にする啜啄の機を与えてくれるであらう。つまり、(IV) 生活の中へ融和とんごうできるといふことである。

もつとも、日常の生活はなほは現実的、具体的である。頭の中で温められている卵はすく役には立たないから、どうしても忙しな実際の考慮のために片隅へ押しやられてしまふ。ものを考えるには、ときどき立ち止まつて心の中をのぞき見るゆとりが必要である。

ものを考える習慣をつければ、めいめい自分だけの思考法がおのずから育つはずである。それが思考のスタイルである。われわれはこれまでも思考の方法を求めたのに急であつて、人によつて異なる個性を反映した思考のスタイルを育てるのに、いささか(4) 怠惰たいだであつたよな気がする。

もちろんスタイルに固執すれば、悪いマンネリズムに陥る。スタイルはたえず新しいものを取り入れて、新陳代謝を繰り返しながら、恒常性を維持する個性でなければならぬ。

(外山滋比古『知的創造のヒント』ちくま学芸文庫)

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) セツリ (2) カンメイ (3) ソツキョウ (4) アンガイ (5) ヨエウ

問二 傍線部①～④の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 稀有 ② 一期一会 ③ 師弟 ④ 怠慢

問三 空欄 [ア] [イ] に入る最も適切な語句を一つ選び、番号で答えなさい。

1. あるいは 2. もし 3. それから 4. たしえ

問四 傍線部(a)(b)の意味を書きなさい。

- (a) 人事をつくして天命をまつ
(b) 読書百遍意おのずから通ず

問五 傍線部(c)「論語」は、中国古代の「四書」の一つである。この書籍は、誰の言行をまとめたものか。その人物名を書きなさい。

問六 傍線部(d)「漱石」(夏目漱石)の作品でないもの次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1. 坊ちゃん 2. 山椒大夫 3. 夢十夜 4. それから 5. 吾輩は猫である

問七 傍線部(1)「これ」とは何を指すか。該当する言葉を本文中から抜き出しなさい。

問八 傍線部(II)「破るべき卵の殻」とありますが、どのような卵のことですか。本文中の言葉を用いて十五字で書きなさい。

問九 傍線部(III)「急に頭がすっきりしてきたように感じた」のはなぜか。本文中の言葉を用いて六十文字以内で書きなさい。

問十 傍線部(IV)「生活の中へ融和できる」とあるが、筆者がその根拠として述べていることを二つ書きなさい。